発行日　2021年3月30日

Newsletter of Center for the History of Meiji University

ニュースレター
明治大学史 No.17

明治大学校歌制定100周年を記念して制作した「明治大学校歌の原型を聴く」（守屋健太郎監督　2020年）より
https://www.youtube.com/watch?v=4J0qLzondmE&ab_channel=MeijiUniversity　（関連記事6・7頁）

目次

（巻頭言）コロナ禍における総合講座　明治大学史資料センター所長　村上　一博　2

センターの研究発信事業　3

Ⅰ　創立者研究会　Ⅱ　人権派弁護士研究会　Ⅲ　アジア留学生研究会　Ⅳ　財界人研究会
Ⅴ　文学者研究会　Ⅵ　三木資料研究会　Ⅶ　キャンパス史研究会　○明治大学校歌制定100周年関連事業

（寄稿）校歌制定100年の取り組みと研究状況　明治大学史資料センター研究調査員　飯澤　文夫　7

大学史資料センター刊行物案内　8

オンライン版　三木武夫関係資料／山崎今朝弥　弁護士にして雑誌道楽／明治大学の歴史／私学の誕生　明治大学の三人の創立者／三木武夫研究／布施辰治研究／明治大学小史　人物編／大学史紀要第27号　小特集　明治大学校歌制定100年

（巻頭言）　コロナ禍における総合講座

明治大学史資料センター所長
村上　一博

大学史資料センターでは毎年度、駿河台・和泉・生田・中野の四キャンパスにおいて、全学共通の総合講座を開講してきた。2020年度においても、秋学期に、オンラインで「明治大学の歴史Ⅰ」を開講した（当初は、春学期の開講を予定していたが、対面授業が不可能となったため、急遽、秋学期に移し、オンライン授業に変更する措置をとった）。

オンライン講義は、①「イントロダクション」に始まり、②「大学・学部の歴史（明治・大正・昭和戦前期）」、③「同（昭和戦後・平成）」、④「創立者」、⑤「校歌」、⑥「平和教育登戸研究所資料館」、⑦「出身財界人」、⑧「教員養成」、⑨「阿久悠」、⑩「キャンパスライフ（明治・大正・昭和戦前期）」、⑪「同（昭和戦後・平成）」、⑫「留学生とグローバル化（中国）」、⑬「同（韓国）」、⑭「総括」の全14回構成で、毎回、レジュメあるいは関係資料を提示しつつ、Zoom録画の配信を行った。講義担当者は、センター運営委員と事務局員で分担したが、慣れないオンライン講義は、所属学部での負担に加えて、さらなる負担を強いることになるため、センターの責任者としては、不開講とすることも考えたが、コロナ禍で大学への帰属意識が薄れ、空虚感に襲われている学生たちを元気づけるために、我々の講座は必要だとの思いから、無理を承知で、開講に踏み切った。厳しい状況下での講座実施となったが、結果としては、各回の講義は、知・情・意に溢れた力作となり、以下に紹介するような学生たちの反応を引き出すことができた。場違いであることは承知しているが、この場をかりて、担当者の先生方に厚くお礼を申し上げたい。

私がコーディネーターを務めた駿河台では、履修者に対して、毎回200字程度の感想文を求め、期末にはレポート（800～1000字）を課したが、そこで寄せられたメッセージをほんの一部だけ紹介しておこう。「この講義により今まで知らなかった明治大学の様々なことを学んで愛校心が増しました」（I.T、法3）、「コロナウイルスの影響もあって明治大学の校歌を歌う機会は滅多に無くなってしまいました。明治大学の卒業生であることに誇りを持ち、そしていつか大声で明治大学の校歌を歌う機会があることを心待ちにして頑張りたいと思います」（S.T、法3、付属高校出身）、「講義を受けられたことは、明治大学の学生として、とても大きな財産となりました」（I.K、法4）、「この講義を受講するまで、正直なところ、明治大学がどのような大学であるか理解していませんでした。しかし、この講義を受講したことで、明治大学について理解を深めることができました。明治大学の卒業生ということに誇りをもって、これから社会人として活躍していきたいです」（O.K、法4）、「講義は、明治大学を卒業してもなお明治大学と私を結び付けるものです。本講義を受講しなければ、淡泊な関わり合いしか持たなかったものが、歴史や思いを学んだことにより、濃厚な大学生活を過ごすことができると思います」（N.M、政経3）。

レポートの中には、この総合講座を全学部全学生の必修科目にすべきだという、嬉しくも恐ろしい提言もあった。こうした学生たちのメッセージに接してしまうと、我々の総合講座は、どのような状況下でも（とくに困難な状況であればあるほど）、続けていかねばならないと強く思うのである。

センターの研究発信事業

大学史資料センターでは、これまで蓄積した知見と資料を研究資源として、学内各セクションや学外機関と連携しながら大学のステークホルダーや社会各層に向けて講演会やシンポジウムなど、センターの研究成果を発信する事業を行っています。コロナ禍で各種制限があるなかではありましたが2020年度も引き続き研究活動を推進しました。

Ⅰ　創立者研究会　（代表　村上一博センター所長（明治大学法学部長））

当研究会は2013（平成25）年に設置され、明治法律学校の創設とその後の発展、および三人の創立者である岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操とその周辺の人々の思想と行動について研究を進めてきた。構成員は、代表の村上一博のほか、運営委員の野尻泰弘（文学部准教授）、山泉進（センター前所長、本学名誉教授、2018年3月まで）、阿部裕樹（センター職員）である。

研究会の正式発足前を含め、これまで創立者出身地の校友会が中心となって刊行した創立者三人の小伝（宮城2002・2010年、矢代2003年、岸本2016年）に全面的に協力するとともに、それぞれの出身地である鳥取市（岸本）・天童市（宮城）・鯖江市（矢代）において幾度となく講演会を開催した。例えば鳥取市では、2015（平成27）年9月に鳥取恵愛高等学校において在校生向けの講演会を実施し、翌2016（平成28）年11月には全国校友鳥取大会において記念講演会の講師を務めた。そのほか、『日本近代法学の先達　岸本辰雄論文選集』（村上一博編、日本経済評論社、2008年）、『私学の誕生―明治大学の三人の創立者―』（創英社／三省堂書店、2015年）、『東洋のオルトラン　宮城浩蔵論文選集』（村上一博編、明治大学出版会、2015年）、『権利自由の揺籃―明治法律学校の建学の精神―』（村上一博著、DTP出版、2020年）などの単行書をはじめ、研究会メンバーが論文を発表してきた。今年度は、コロナ禍のため、資料収集や講演など一切の活動を休止せざるを得なかったが、来年度からは、10年後の創立150周年に向けて、研究会の名称を「150周年事業準備研究会」（仮称）と改称して、さらなる研究会活動の活性化を企図している。

『権利自由の揺籃―明治法律学校の建学の精神』

Ⅱ　人権派弁護士研究会（代表　村上一博センター所長）

当研究会は2006（平成18）年に設置され、明治法律学校および明治大学出身の法曹（裁判官および弁護士）の動向について研究を進めてきた。構成員は、代表の村上一博と阿部裕樹（センター職員）のほか、研究調査員として、山泉進（センター前所長、本学名誉教授）、飯澤文夫（元本学職員）、中村正也（元本学職員）、長沼秀明（川口短期大学准教授）に参加いただいている。

これまで、尾佐竹猛大審院判事と布施辰治弁護士について、それぞれ『尾佐竹猛著作集』全24巻（ゆまに書房、2005年）・『布施辰治著作集』全16巻・別巻1（ゆまに書房、2007年）、および研究論文集である『尾佐竹猛研究』（2007年、日本経済評論社）・『布施辰治研究』（2010年、日本経済評論社）を刊行し、また2018（平成30）年には『山崎今朝弥―弁護士にして雑誌道楽―』（論創社）を発表したほか、出身地の岡谷市で記念講演会を開催した（そのもようは長野朝日放送で特別番組としてテレビ放映された）。『大学史紀要』においても第12号（2008年）、第13号（2009年）、第23号（2017年）で人権派弁護士研究の特集を組んで成果を発表している。そのほかにも、阿保浅次郎（弘前市）、長谷川太一郎（福島県大沼郡金山町）、長野国助（今治市）などについて調査を実施している。

鵜澤総明関係資料調査のもよう（写真は鵜澤総明顕彰碑）

Ⅲ　アジア留学生研究会（代表　高田幸男センター副所長（明治大学文学部教授））

当研究会は、本学の100年を超えるアジア留学生受け入れの歴史を扱う研究班として2010（平成22）年に設立された。構成員は、代表の高田幸男のほか、センター所長の村上一博（法学部教授）、運営委員の李英美（商学部教授）、三田剛史（商学部准教授）、山下達也（文学部准教授）、研究調査員の土屋光芳（政治経済学部教授）、鳥居高（商学部教授）、鈴木将久（元政治経済学部教授、現東京大学教授）、事務局の阿部裕樹（センター職員）である。このほか協力者として山泉進（センター前所長、本学名誉教授）、長沼秀明（川口短期大学准教授、明治大学兼任講師）がおり、また、韓国、台湾などの本学校友会支部とも協力関係を構築している。このような体制の下、本学に学んだ留学生（植民地時代の朝鮮･台湾等を含む）の全貌の把握と、個々の留学生の顕彰を進め、その一環として、2014年、15年には韓国や台湾の老校友に対するインタビューもおこなっている。

これらの成果は、まず『明治大学小史人物編』（学文社、2011年）の「アジア留学生」の章にまとめ、『大学史紀要』においても2014年、2015年に特集、2020年に小特集を組んだほか、随時成果を発表している。そして2019年には『戦前期アジア留学生と明治大学』（高田幸男編著、東方書店）を出版した。また、2014年にはアジア教育史学会との共催で国際シンポジウムを、2019年には中国人留学生史研究会との共催でシンポジウムを開催した。さらに2014年度から大学院において研究科間共通科目「学際系総合研究」を開講し、研究の最新成果をオムニバス形式で講義している。

2019年度には李英美を代表とする科研プロジェクト「東アジア近代法学・関連諸科学ネットワークと人材育成」がスタートし、同年には韓国での史料調査と老校友へのインタビューを実施した。だが、年度末に予定していた台湾調査はコロナ禍のため中止となり、2020年度も、緊急事態宣言により国内での史料調査もできない状況が続いている。現在は、来年度以降の調査再開へ向けて史料の購入と既収史料の分析に力を入れており、プロジェクトの成果は２冊目の論文集にまとめられる予定である。

『戦前期アジア留学生と明治大学』

Ⅳ　財界人研究会（代表　白戸伸一委員（明治大学国際日本学部教授））

当研究会は2013(平成25)年に設置され、故秋谷紀男教授（明治大学政治経済学部）を中心に『明治大学小史人物編』（学文社、2011年）の「財界の人びと」にまとめられたような、実業界で活躍してこられた本学出身の企業家・経営者の足跡を解明してきた。2016年以降の構成員は、代表の白戸伸一のほか、センター所長の村上一博（法学部教授）、研究調査員の福井淳（大正大学文学部教授）、事務局の阿部裕樹（センター職員）である。

2017年以降に調査対象とした人物は、セーレン会長川田達男氏（2017年10月にインタビュー、『大学史紀要』第24号収録）、日本経済評論社元社長栗原哲也氏（2018年11月にインタビュー、『大学史紀要』第25号収録）、小田急電鉄元社長利光鶴松のご子孫、利光國男氏・同ご子息剛氏（2019年9月にインタビュー）や、山下汽船（現商船三井に統合）創業者山下亀三郎等である。

今年度は、コロナ禍のため現地調査やインタビューを実現できず、上記の利光について「利光鶴松略年表―明治法律学校初期卒業者の足跡―」（『大学史紀要』第27号）を作成したが、来年度は利光鶴松の調査・研究を継続しまとめることや、山下亀三郎の調査、丸善石油（現コスモ石油）元社長宮森和夫、日産ディーゼル工業（現ＵＤトラックス）元社長大久保正二等についても調査を進める予定である。

利光鶴松関係資料調査のようす

Ⅴ　文学者研究会（代表　冨澤成實委員（明治大学政治経済学部教授））

当研究会では2017年の設置以来、明治大学に関係する文学者や評論家を中心に研究を行っている。構成員は代表の冨澤成實のほか、松下浩幸委員（農学部教授）、吉田悦志研究調査員（名誉教授）、村松玄太室員（学術・社会連携部博物館事務室）である。

これまでおもに、本学の卒業生である小説家・子母澤寛、および本学駿河台キャンパスがおかれている千代田区と日本近代文学の関わりについて研究を進めてきた。子母澤寛の出身地である北海道石狩市厚田の関係者と連携しながら、子母澤寛文学賞の設立や子母澤文学の普及活動に努めてきた。明治大学史資料センター『大学史紀要』第 26号 (2020・ 3)では、「厚田ふるさと平和・文学賞」第 4回記念シンポジウム (2019・10・19)におけるそれぞれの講演をもとに執筆した、冨澤成實「子母澤寛 と志賀直哉―動物作品をめぐって―」と吉田悦志「牧田重勝年譜解題―子母澤寛「或る人の物語」のモデル―」を発表 した。他方で松下浩幸委員を中心に、近代日本の中心地であった「宮城」の街、旧神田区・麹町区の風景の文学作品におけるイメージ形成や受容についての研究計画書を作成し、2021年度科研費（基盤C）申請を行った。

来年度は上記の研究計画をさらに推進するとともに、コロナ禍の収束後には、北海道や子母澤の関係先、および東京や千代田区の調査などを実施する予定である。

厚田ふるさと平和・文学賞記念シンポジウムに登壇する研究会メンバー

Ⅵ　三木資料研究会（代表　小西德應委員（明治大学政治経済学部長））

本資料センター所蔵の三木文書をデジタル化した「オンライン版　三木武夫関係資料」（丸善雄松堂）が2019年末に発売されるに際して、その解題を本研究会の全メンバーで担当した。文書の所蔵に至った経緯や資料全体の概要を記した「三木武夫とその関係資料について」、および公開資料を三木の政治活動の時期ごとに分け、「池田勇人・佐藤栄作内閣期」「田中角栄内閣期」「内閣総理大臣期」「総理退任以降」を各メンバーが執筆した。オンライン公表することにより、所蔵資料の閲覧希望者に対応する資料センター事務室の負担を減らしながら資料活用を促すとともに、三木文書の存在をアピールできる。それにより、資料センターと本学のプレスティージ向上に貢献できるものである。

なお当研究会では「55年体制期における三木武夫の非核・東アジア平和外交に関する政治史的研究」をテーマとして、2021年度の科研費申請を行っている。三木が冷戦下、ベトナム戦争終結に向けた和平交渉、非核三原則の堅持、日中国交正常化交渉、核不拡散条約の批准など、「対話」に力点をおいた東アジア非核・平和外交を展開しただけでなく、それぞれで実績を残していることに焦点を当てるものである。三木政治や日本外交の再検討にとどまらず、今日の硬直化した世界情勢、とりわけアジア外交において、いま一度「対話」外交に光を当てることで、状況改善に資することを狙ってのことだ。申請の採否に関わらず、コロナ禍収束に合わせ精力的に活動をする予定でいる。

オンライン版　三木武夫関係資料パンフレット

Ⅶ　キャンパス史研究会（代表　山田朗委員（明治大学文学部教授））

当研究会は2019年11月の発足以来、明治大学の各キャンパスの歴史（キャンパスが設置される前の歴史を含む）の調査・研究を進めている。構成員は、代表の山田委員の他、村上一博委員（所長）・高田幸男委員（副所長）・野尻泰弘委員・李英美委員・村松玄太事務局員である。

各キャンパスにおける新校舎等の建設状況を勘案して、和泉キャンパス、生田キャンパスの順でキャンパス設置前の歴史、キャンパス設置後の歴史を調査・研究する予定であったが、具体的な調査活動開始を予定した2020年3月以来、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から本格的な活動ができないままでいる。それでも2020年度においては、和泉キャンパスのキャンパス設置以前の歴史（江戸時代の幕府塩硝蔵から明治・大正期の陸軍和泉新田火薬庫）を明らかにするための文献資料の収集、和泉キャンパスの立替予定の第2校舎関係の資料調査、新校舎建設予定地を中心とした地域の実地調査を実施した。

来年度は和泉キャンパス関係の調査・研究を進展させるとともに、生田キャンパスの関係の調査・研究に着手したいと考えている。

和泉キャンパス・甲州街道沿いの土手の調査

○　明治大学校歌制定100周年関連事業

明治大学校歌は1920（大正9）年に制定され、昨年制定100年の記念すべき年を迎えました。そのことを記念し、明治大学史資料センターでは、明治大学校歌の成り立ちを知っていただくため、以下のオンライン講演会や関連映像を制作し公開しました。

1　講演

○校歌から見た明治大学の原風景　児玉花外の詩魂にも触れて（講師　村上一博明治大学史資料センター所長）　（約30分）

○校歌はどのようにして生まれたか（講師　飯澤文夫明治大学史資料センター研究調査員）（約50分）

2　〈幻〉の校歌を再現―明治大学校歌の原型を聴く（約12分　守屋健太郎監督　ピアノ:土山亜矢子氏　歌唱:グリークラブOB会）

※本誌表紙写真はその模様の一部です。

3　校歌初演サークルによる校歌実演

○寺澤ひろみ氏独奏による校歌初演再現（約2分）

○現役生と寺澤氏のリレー演奏（約3分半）

※上記の映像は校歌100周年｜第23回明治大学ホームカミングデー 特設サイト「校歌100周年」（https://www.meiji.ac.jp/koyuka/homecoming/2020/song/）にて公開されています。ぜひご覧ください（以下は同サイトへのQRコードです）。

（寄稿） 校歌制定100年の取り組みと研究状況

明治大学史資料センター研究調査員
飯澤　文夫

1920年（大正9）に成立した校歌〈白雲なびく〉が100年を迎えた。

2019年9月に、同年春から連合父母会の後援を受けて活動していた明大スポーツ新聞部を中心とする学生有志団体「明治大学校歌誕生100年記念プロジェクト」から学長に、「校歌の日」制定の嘆願書が提出され、成立の年に本学ハーモニカソサエティーが公の場で「明治大学校歌」として初めて演奏した10月28日を「校歌の日」とする理事会決定がされた。

これを受け、2020年10月28日には、オンラインにより学生有志による校歌誕生100年記念イベントが開催された。

翻ってみれば、そもそも校歌の成立は、武田孟、牛尾哲造、越智七五三吉ら学生たちの奔走によって実現したものであり、今また学生たちの熱意によって「校歌の日」が制定されたことは、まさに本学の伝統であり、新たな歴史を刻んだこととして感慨深い。

連合父母会と大学支援部父母会事務室（担当杉浦哲也さん）は前述のほかにも、2019年11月24日に父母交流会講演会「校歌誕生物語」（飯澤講演）開催、機関誌『「今」が未来をつくる』4-7（2020.7-10）に「明治大学校歌誕生物語1－4」（飯澤執筆）と『同』8（2020.11）に「校歌誕生100周年」（村松玄太執筆）の掲載、ホームページでのキャンペーンなどで、「校歌の日」制定の機運を盛り上げる先導的な役割を果した。

経営企画部広報課（担当戸谷佳那子さん）も雑誌『明治』87（2020.10）で「校歌誕生百年―＜我等に燃ゆる希望あり＞」（飯澤執筆）を掲載した。

大学史資料センター（担当村松）が行った関連事業は、本誌P.6のとおりである。特筆すべきは、作曲家山田耕筰自筆譜に基づく、ピアノ土山亜矢子さん・歌唱グリークラブOB会（会長渡辺利雅さん）による校歌成立時の再現演奏と、守屋健太郎監督（1992年法学部卒）によるドキュメンタリー「明治大学校歌の原型を聴く」の制作である。

この基になったのは、山田耕筰研究者で株式会社クラフトーンの久松義恭さんによる本学図書館及び明治学院大学遠山一行記念日本近代音楽館所蔵の校歌楽譜の綿密な考証である。従来の校歌研究は、成立に関わるトピックスに目が向けられがちであったが、音楽の専門的な視点から初めて評価がされたものである（『大学史紀要』27　2021.3参照）。

再現演奏と音楽的再評価は、福岡英朗法学部事務長の尽力によって実現したもので、感謝を申し上げる次第である。

さらに、村松によるハーモニカソサエティー初演の写真と、1920年10月23日の第1回漕艇協会レガッタ（隅田川）で出来上がったばかりの校歌が歌われる様子を伝える『東京朝日新聞』記事の発見（記事では「応援歌」と記述）や、当時の社会背景と学内状況の分析にも基づく論考の発表（『大学史紀要』27）もあり、研究面でも充実した一年になった。従来の研究に、久松さんらの論考と合わせ、総合的な校歌研究の一書が編まれることを期待している。

博物館グッズとして、耕筰の自筆譜をあしらったクリアファイル（頒価150円　博物館来館者向けに販売）も製作された。

最後に、成立から100年が経過し、歌詞も歌われ方も微妙に違ってきている。そうした変化は、耕筰と補作者の西條八十も許容するところであるが、現行楽譜で冒頭の「しらくも」の「し」が、本来4分音符1音で表記されるべきところが、なぜか付点8分音符と16部音符2音で表記されている。ここだけはこの機会に改めるべきである。

校歌が初演されたハーモニカソサエティー演奏会（1920年10月28日）。舞台背後に「明治大学校歌」のめくりが見える

好評既刊 ※『オンライン版　三木武夫関係資料』及び『明治大学の歴史』以外の書籍は全国書店でお買い求め下さい。

オンライン版 三木武夫関係資料 〈丸善雄松堂刊〉

明治大学史資料センター編　全4部　定価2,400,000円+税（2019・11）　※機関のみ購入可

第 66 代内閣総理大臣をつとめた三木武夫（1907 ～ 1988）が残した膨大な文書群。外交文書、省庁・党内資料など各種政策資料をはじめ、国会答弁資料、総裁選・選挙関連、講演・演説原稿、日記・手帳・書簡・メモなど、戦前から 80 年代にかけた大量の一次 史料で構成され、質量ともに一級の史料群。

山崎今朝弥 弁護士にして雑誌道楽 〈論創社刊〉

明治大学史資料センター監修　山泉進・村上一博編著　四六判並製　346頁　定価2,800円+税（2018・10）

「奇人」といわれた弁護士・山崎今朝弥が遺した数々の「奇文」に漂う諧謔と飄逸、人権や平等を読み解き、一貫して民衆の弁護士として生きた山崎の業績と人柄に迫る（論創社ウェブサイトより）。

明治大学の歴史 〈DTP出版刊〉

明治大学史資料センター編　四六判並製　363頁　定価2,530円+税（2017・11）

明治大学の現在と過去の歴史について、多様な側面から光を当てた入門書。三省堂明治大学駿河台店（03-5282-3480）・Amazonにて購入可。

私学の誕生 明治大学の三人の創立者 〈創英社／三省堂書店刊〉

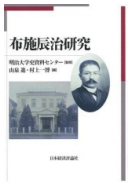
明治大学史資料センター編　四六判並製　240頁　定価1,700円+税（2015・3）

明治大学の創立者・岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操の生涯をわかりやすく紹介する初めての公式本。

三木武夫研究 〈日本経済評論社刊〉

明治大学史資料センター監修　小西德應編著　A5判上製　400頁　定価5,200円+税（2011・10）

国民を恐れ、政党政治の未来を信じた「議会の子」三木武夫元首相。その実像に迫る。



布施辰治研究 〈日本経済評論社刊〉

明治大学史資料センター監修　山泉進・村上一博編著　A5判上製　328頁
定価4,000円+税（2010・12）

日本のシンドラーとも呼ばれた「人権派弁護士」布施の多面的な活動を史料とともに検証する。

明治大学小史　人物編 〈学文社刊〉

明治大学史資料センター編　四六判並製　248頁　定価2,300円+税（2011・10）

明治大学が輩出した人物を大学行政・アカデミズム・法曹・政治・財界・作家・芸能文化・スポーツ・アジア人留学生の諸分野から119名を精選して紹介。

定期刊行物 ※入手方法についてはセンターまでお問い合わせ下さい。

大学史紀要第27号

小特集　明治大学校歌制定100年　A5判並製（2021・3）

小特集は、明治大学校歌100年関連論稿・校歌原詞譜面など。関連資料紹介、各種書評も。

ニュースレター明治大学史　No.17　http://www.meiji.ac.jp/history/
発　行　日　2021年3月30日
編集・発行　明治大学史資料センター　所長　村上　一博
所　在　地　101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1　電　話　03-3296-4448　FAX　03-3296-4365